様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月９日現在

機関番号：４２７２３
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５２００５１
研究課題名（和文）　ジャイナ教のマンダラに関する基礎的な研究

研究課題名（英文）　A Preparatory Study in Jaina Mandala

研究代表者
矢島　道彦（YAJIMA MICHIHIKO）
鶴見大学短期大学部・歯科衛生科・教授
研究者番号：８０１４３３３７

研究成果の概要（和文）：インド各地を訪ねてジャイナ教のマンダラ図像を収集、画像データ化するとともに、ジナの生涯を戯曲的に再現するパンチャ・カリヤーナカの儀礼の調査を二度実施して、写真とビデオで記録した。これらのデータの整理・分析と、新たに入手した儀礼のテキストの解読を行ない、その成果の一部を学会等で報告・発表した。ヒンドゥー儀礼の影響が色濃いジャイナ教儀礼のなかで、パンチャ・カリヤーナカの儀礼はジャイナ教に固有のもので、とくにジナの開悟に伴う「聖なる集い」（サマヴァサラナ）の儀礼は、仏教のいわゆる尊像マンダラの対応物として注目される。

研究成果の概要（英文）：With the grant-aid, I made study trips to India several times in the period and collected data for my research on Jaina mandala. It was very lucky that I could have opportunities to attend the ceremonies called ‘Panca-maha-kalyanaka Mahotsava’ at the two different Digambar Jain Temples, one in Bhilai, Chattisgarh and the other in Bopal, M.P., and could get the data of ‘the holy assembly of the Jina (samavasarana)’ with some old texts of the rituals. With the help of those documents which I have collected in the period, some more papers are ready to be read in the academic meetings.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	2,000,000	600,000	2,600,000
２００９年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２０１０年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・印度哲学・仏教学
キーワード：仏教学・仏教史全般・マンダラ

１．研究開始当初の背景

本研究のテーマであるジャイナ教のマンダラ（本研究においては仏教のマンダラと対比し得るジャイナ教の観念や図像を便宜的に「ジャイナ教のマンダラ」と呼称し、とくにここでの「マンダラ」の語は、特定の尊格を中心に置くいわゆる尊像（尊形）マンダラを表わすこととする）に関する研究は、研究代表者自身が約 20 年前に着手し、自ら切り開いて来た分野であり、とくにサマヴァサラナと呼ばれるジャイナ教の図像と文献を、仏教の尊像マンダラの対応物としていち早く学界に紹介し、マンダラの研究に新たな視点を提示した。最初の論文は 1992 年に発表し

た「〈聖なる集い〉のシンボリズム」で、以来、さまざまな学会において研究報告や発表を行ってきた。しかしこれまでに代表者が行ってきた研究は、主として文献上のものであり、ジャイナ教のマンダラに関する図像資料に関しては、U. P. シャーや J. ジャイン&E. フィッシャー、A. ゴーシュ、P. パルなど従来インドや欧米で出された出版物のなかの図版データを参照するだけで、自ら収集したものは数十年前のインド滞在中に得たわずかな図版資料のみであった。しかもそれらの多くはすでに古く、印刷も不鮮明で、研究には適さないものとなっている。それゆえ、あらためて現地に赴いて直接自身の目で図像を確認し、それらを解析度の高い現在の機器を用いて新たに取り直し、画像データとして収集する必要性を痛感していた。また近年、海外で急速に進むジャイナ教の儀礼の研究に触発されて、当該研究に関係するジャイナ教の儀礼を現地で調査する必要も生まれていた。儀礼の調査研究にどこまで踏み込めるかは当初の段階では不確かであったが、幸いにも期間中に2度現地で調査する機会を得て、研究は飛躍的に進展することとなった。

２．研究の目的

本研究は、かつて研究代表者が科学研究費補助金（平成9年度～10年度基盤研究（C）(2)）を得て行ったジャイナ教のマンダラ図像に関する研究を発展させて、ジャイナ教と仏教のマンダラとの比較研究を行うための準備的・基礎的な研究であり、とくに両者の異同や影響関係などを詳しく考察するために必要な文献及び図像データの収集と整理・分析を行うことを目的とする。ジャイナ教のマンダラは、仏教のマンダラと同様、「内と外」、「聖と俗」といった異次元の関係を常に意識しつつ設定された聖なる空間・領域である。その意味で両者は基本的に異なるものではない。また、仏教のマンダラの一般的な特徴とされる、中心の存在、交替性、複数性、調和性、全体性などの特徴も、大方はジャイナ教のマンダラにおいて共有されている。しかし一方では、当然のことながら、ジャイナ教の独自の特徴も認められ、また細部に亘って見れば、仏教のマンダラとの間に種々異なる点も見出される。おそらくジャイナ教のマンダラの最も大きな特徴は、文献上は獅子座に坐して説法しているジナが、図像の上では蓮華座に坐した瞑想形で表わされているという、文献上と図像上でのジナの姿の相違である。いいかえれば、ジャイナ教の図像に見られる身体表現上の抑制、あるいはジャイナ教の「造像美術の自立性」(K. Bruhn, 1969)が、ジャイナ教のマンダラの理解に、ひいては仏教のマンダラとの比較の上でも，重要かつ不可欠な視点となってくるように思われる。

本研究の研究代表者は、最終的には上のような点も含めて、ジャイナ教のマンダラを仏教のそれと仔細に比較検討して、両者の異同、また相互の影響関係などを解明したいと考えているが、しかし当面の目標としては、過去の研究をベースとして、ジャイナ教のマンダラに関する文献の解読作業を進めるとともに、インドの現地に赴くなどして必要な図像資料の画像データを可能な限り蓄積して、仏教のマンダラとの比較を行うための準備的な作業を実施したい。特に本研究では、いわゆる「尊像マンダラ」に対応するジャイナ教のマンダラ類を幅広く収集し、それらを整理・分析して、意味や形態の史的変遷を考えることで、最終的な目標に近づくための準備を整えたいと考える。

３．研究の方法

上の目的を達成するために、ジャイナ教のマンダラに関する文献と図像を幅広く収集するとともに、インドの現地に直接赴いて、関連する図像等を自身の目で確認し、なおかつ画像データ化して持ち帰って、研究の基礎資料を一層充実させる。

文献に関しては、未入手の注釈書類を中心に可能な限りテキストを整え、解読を進める。図像に関しては、ジャイナ教の美術や図像に関する海外の出版物を必要に応じて入手し、研究に役立てるとともに、現地に赴いて自ら画像データを収集する。とくに、デリー国立博物館、ラクノウ州立博物館、マトゥラー博物館などは早期に現地に赴いてデータを持ち帰る。またマトゥラーやウダイギリなどの遺跡の調査、ラーナクプルなどのジャイナ教寺院への調査も、できるだけ早期に実現する。

当初案では、グジャラート州のカーティアワールや、またオリッサ州への現地調査も計画していたが、以下の成果欄に述べるように、チャッティースガルフ州などでジャイナ教の寺院の儀礼を調査できることになったため、後半の計画には多少変更が生じた。

４．研究成果

研究代表者は、期間中にインドへの調査旅行を計5回実施した。その内容は大別して前半と後半の2期に分けることができる。まず、前半は各地の寺院・博物館に赴いて、サマヴァサラナを中心とするジャイナ教のマンダラ関連の図像資料を調査し、データを収集した。主な調査地はデリー、ラクノウ、マトゥラー、バローダ、ムンバイ、ウダイプル、ラナクプル、アハル、ジャイプルなどである。このうち、とくにラクノウの州立博物館では、許可を得て地下収蔵庫に入り、奉献板などのマトゥラー出土品を調査する機会を得て、画

像データも持ち帰ることができた。周知の通り、マトゥラーの古代遺跡から出土した図像類の多くはこのラクノウ州立博物館に収蔵されている。なお、研究代表者が持参していた解読中の銘文の資料について、同博物館のスタッフが関心を示し、解読の作業への協力を申し出てくれた。その場で約 2 時間、数名のスタッフとともに議論しつつ、銘文の解読の手助けを得たことは極めて有益であった。またその際、ジャイナ教の碑文文字に関する貴重な資料の提供も受けた。デリー国立博物館では、特別に閲覧を許可された博物館の収蔵品リストから、2 日間かけて約 300 点の図像データを抜き出し、現像の申請を行なってそれらの写真版を入手することに成功した。これは同博物館に収蔵されるジャイナ教のブロンズ及びストーン作品のほぼすべてを網羅するものであり、本研究の貴重な成果の一つである。こうした現地調査からわかったことは、初期の奉献板（アーヤーガパタ）や四面像（チャトゥルムカ）を始めとするサマヴァサラナ（仏教のマンダラの一般的な対応物）関連の図像に限らず、ジャイナ教の歴史には数多くのマンダラ的な図像が現れていること、また後代には、仏教（密教）からの直接的な影響によるものか、じっさいに「マンダラ」の名を冠する図像も幾種か生まれていることなどである。また、ヤントラ図形をときにマンダラと呼称する例なども存在している。ジャイナ教の寺院や聖地の造営プランには、想像以上に広くサマヴァサラナの理念が影響しているものとみえ、ギルナールやシャトゥルンジャヤなどの聖地を描いたジャイナ教の細密画の流行も、マンダラ的な観念の流布と無縁ではありえない。仏教のいわゆる「参詣マンダラ」との比較も、おそらく興味深い研究テーマとなるかと思われる。

後半は主として儀礼を中心とする現地調査にシフトし、チャッティースガルフ州のビラーイーとマディヤプラデーシュ州のボーパールの２都市にそれぞれ滞在して、ディガンバラ派のジャイナ教寺院で行なわれたジナ像安置式（ジナ・ビンバ・プラティシュター）とそれに伴う「５大慶事（パンチャ・マハーカリヤーナカ）」の儀礼について詳しく調査した。ジャイナ教の儀礼にはヒンドゥー儀礼と共通する部分も多々見られ、とくに朝夕に日常の義務として行なわれるプージャーやジナ像の安置式のなかには、ヒンドゥー儀礼の影響が色濃く認められる。しかし、安置式に伴って行なわれるジナの生涯を再現する「５大慶事」の儀礼は、純粋にジャイナ教独自のものであると思われる。この儀礼をビラーイーとボーパールで 2 度に亘って詳しく調査し、かつほぼ完全な形で記録できたことは本研究の最大の成果である。なかでもジナの開悟に伴って行なわれるサマヴァサラナ（ジナの説法を聴聞する神々・人間・動物の集会）の儀礼は、仏教のマンダラとの比較の上できわめて重要な儀礼であり、今回入手した資料は学術的に高い価値を有するものと確信している。ボーパールの儀礼ではサマヴァサラナの部分は簡略化され、会場内に大きめの立体模型が設置されただけであったが、ビラーイーでの儀礼では屋外のスペースが用いられ、儀軌に従ってサマヴァサラナの設計図が描かれ、所定の区画にさまざまな聴聞衆（神々・人間・動物）が配置されて、文字通り巨大なマンダラが再現された。こうした儀礼のデータも活用して、すでに学会等で成果を公表し始めているが、今後さらに、『プラティシュターラトゥナーカラ』などのジャイナ教の儀礼に関するテキストの解読も進めながら、一層研究を深めて、本研究の成果の公表に努めたいと考える。

仏教のマンダラとの本格的な比較研究は今後の課題ではあるが、一般的な特徴とされる 7 つの特徴、すなわち、１．空間、領域、場、２．複数性、３．中心の存在、４．調和性、５．動的な流れ、６．交替性、７．全体性、のいくつかについて、ジャイナ教のマンダラにおいてどの程度妥当するかを簡略に述べておく。１については、もちろんジャイナ教のマンダラも「広がりをもった空間」であり、「内と外（すなわち聖と俗）という異次元」がつねに意識されている．開悟したジナのために神々によって浄道場がなされ、巨大な聖なる空間が創られるのは、離貪者（ヴィータ・ラーガ）であるジナの「聖性」を守るためのものである。２の複数性は、「複数の要素の集合体」という意味で、ジャイナ教のマンダラもジナとそれを囲むさまざまな要素（神々、人間、動物など生きとし生けるもの）の集合体である。３の中心の存在は、焦点の存在とも言われている。具体的には、中央につねに中心尊格（本尊）が位置し、聖なる世界を代表するという特徴である。これも最初に前提としたジャイナ教のマンダラの特徴であり、ジャイナ教の場合は中心にはつねにジナがみられる。４の調和性は、少なくとも「敵対関係にある者の共存」については、ジャイナ教のマンダラにもサマヴァサラナの第二塁壁内部に「天敵関係の動物」が含められ、明らかな共通性がみられる。ただし、自派のメンバーから、「異教徒」はどうかと実際に問われた学僧ヴィジャヤセーナ（17 世

紀）の記録が残されている。かれは「規則上は入らないことになっているが、ときには入る」と曖昧に答えたという。５の動的な流れは、「力の動き、もしくは流れを示すダイナミズムを内包」していることと説明される。「中央の本尊の力への遠心的な波及」と「内なる本尊に向かっての求心的な帰依」は、おそらくそのままジナの説法をテーマとするジャイナ教のマンダラにも当てはまるであろう。とくに説法の媒体とされる言語の特殊性は、そのような「順・逆の二様の流れ」を瞬時に可能にする。６の交替性については、ジャイナ教のマンダラにおいても顕著に現われる特徴となっている。そもそもサマヴァサラナは、いずれのジナの場合でも、開悟とともに持たれ得るものであり、その意味で中心尊格は明らかな交替性を有する。その性格がさらに儀礼のなかでは「チョービーシー像」などの礼拝像が媒体となって限定を失い、つねにいずれのジナでも呼び出せるという自由なものに変容している。７の全体性は、ジャイナ教のマンダラの場合、中央のジナとその周囲の神々や人間、その他の生き物たちが一体的にマンダラ世界を形成している。とくにそこにイメージされているのは、ジャイナ教徒が理想とする「ジナを中心とする教団」である。ジナのエピセットであるティールタンカラの「ティールタ」とは、その意味での特殊な用法である。こうした仏教のマンダラとの比較研究は、今後本格的に取り組んで行くことになるが、本研究ではそのための基礎となる資料の収集を行うことができた。

なお、ジャイナ教の儀礼を調査する過程では、ディガンバラ派の高僧（ヴィシュッダサーガル師）とその弟子衆との交流も生まれ、同派の出家者に密着してかれらの生活の実態を垣間見る機会もあり、そこから数多くの貴重な情報を得ることができた。またジャイナ教の儀礼を執行するプラティシュター・アーチャーリヤたちとの交流もあり、きわめて有益な情報を得ることができた。本研究代表者がこれまでに行なってきたジャイナ教のマンダラに関する研究は、こうした人々との交流を通して格段に深まり、今後さらに飛躍的に進展することが期待される。とくにジャイナ教の教団が今日にまで存続し得た理由を考えるときに、ジャイナ教のマンダラの中心に置かれるジナという尊格と、その教えを実践するジャイナ教の出家僧との関係、また儀礼のなかで両者を結び付けるアーチャールヤの存在を無視することはできない。仏教のマンダラとの比較は、最終的にはそのような教団史的な側面も含めて解明したいと考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
矢島道彦、インドの図像を読む～見かけ上とじっさいの意味～、パーリ学仏教文化学会、査読有、24 号、2010、pp.131-141.

〔学会発表〕（計１件）
矢島道彦、ジャイナ教のマンダラは何を表わしているか、日本印度学仏教学会・第 61 回学術大会、立正大学、2010.9.10

６．研究組織
(1)研究代表者
矢島　道彦（YAJIMA MICHIHIKO）
鶴見大学短期大学部・歯科衛生科・教授
研究者番号：80143337